

最後にもうひとつ、山頂の十字架をめぐる今日の問題を紹介します。それが、十字架の破壊です。数年前から、山頂の十字架が何者かの手で破壊されるという事件が相次いで発生しています。スイスでは山岳ガイドの男が逮捕されました。無神論者であるこの犯人は、歴史上の戦争や虐殺の多くは宗教（とくに一神教）が原因であると語り、「自由な場」であるべき山頂を勝手に占拠しているキリスト教最大の象徴である十字架を排除することで、宗教の残虐性について世の中に議論を喚起したかった、と十字架破壊の理由を述べています。

ガムスヨッホ (Gamsjoch, 2,452m) というテイロルの山でも、二〇〇五年に山頂の十字架が破壊されました。二〇一一年にわたしが登ったときは、小さな木製の十字架が申し訳程度に置かれていただけでしたが、二〇一三年には立派な十字架が再建されていました。実は数年前からガムスヨッホ頂上にロープウェイを設置して、観光客を呼び寄せようというプロジェクトが持ち

上がっており、十字架破壊はそれに反対する個人あるいは集団によるデモンストレーションだったのだらうと言われています。

ガムスヨッホには、野生のカモシカ (Gemshe: 獵師たちは Gams と呼びます) が多く生息しており、山の名前の由来にもなっています。またオーストリアの国花でもあるエーデルヴァイスの自生地としても知られています。二〇〇〇メートルを超える山岳地帯にだけ自生する花ですが、ロープウェイが設置され、多くの登山客が訪れる山では、なかなか見つけることはできません。もちろん、自然保護が目的だったとしても、十字架の破壊行為は決して正当化できるものではありませんが、人間と自然との関係——あるいは、自然環境をめぐる人と人との関係——を考えるうえで、この事件は今日的な重大な問題を孕んでいるように思います。人間が自然環境といかなる関係を取り結ぶのか、それを歴史的な視点から読み解くことこそ環境史研究の目的・課題であります。皆さんはこの事件

についてどのように感じられるでしょうか。

自分の好きな山の話ばかりしてしまいました。学部生の皆様へのメッセージとしては、山頂を目指せとは言いませんので、ぜひ図書館の本の森を歩き回っていただきたいと思います。ご自身が「これだ」と思えるテーマをそれぞれに見つけてください。

### 東南アジアを歩く、掘る、考える

深山 絵実梨

史学会連続講演会「わたしと歴史学、わたしと考古学」の発表要旨として、改めて自身の研究フィールドである東南アジアについて触れながら、考古学の面白さと考古学を通して得られる物について考えてみた。小稿が考古学への興味、大学での学びへの一助となれば幸いである。

そもそも私自身が考古学を始めたきっかけは、「昔のヒトが触っていた物を自分も

触りたいから」であった。しかし、「考古学者」という職業に対するあこがれは、周囲に（特に学歴重視の社会において）理解されるものではなかった様に感じる。早稲田大学へ入学したことで晴れて考古学者への道を踏み出し、当時のカリキュラムにあった「考古学基礎演習」、「考古学基礎講義」において基本的な導入を得、専修進級後の考古学実習で測量や実測などの基本を学ぶこととなった。

私の考古学人生の決定打は二年生の夏に打たれた。山形真理子准教授（当時）に、ベトナムでの十日間余りの夏期調査へお誘い頂き、二つ返事で参加希望を伝えた。自分でも驚く位ふわつとした（しかし迷いのない）足取りで、現在につながる重要な一歩を踏み出した。このとき調査した、ベトナムの鉄器時代甕棺墓文化（サーフィン文化）とその副葬品研究が現在も私の主要な関心事で、先史時代海域東南アジアのヒトとモノの移動・交易活動の復元をテーマとして様々な調査に参加し研究を進めて

きた。

考古学研究をする際、まず全ての基礎となる資料（情報）を集める必要がある。はじめの段階では、発掘報告書や論文の入手などが主な作業となり、次に既に為されている報告が自分の研究にとって充分でない時、資料が収蔵されている博物館や大学へ赴き資料調査をおこなう。

遺跡が所在する場所へ行き、周囲を歩き回る「踏査」をおこなうことも多い。思い

出深いのは、フィリピン・ルソン島北部の石灰岩台地に位置するアルク洞穴という先史時代埋葬遺跡の踏査である。川に面した断崖の、標高二百メートルに位置する遺跡まで宿舎から四時間ほど歩いた。石灰岩がゴロゴロと転がる山道で、現地の職員にとっても実に十数年ぶりの踏査であつたらしい。洞穴内は盗掘によって大きく様変わりし、盗掘者が持ち込んだ洗剤の空き容器などを見て、「こんなところで生活していたのか」と半ば感心してしまったことを覚えていいる。遺跡からは遠くの街まで見渡す

ことができ、まさに絶景であつた。こんな景色のいいところに葬られたら後顧の憂いもなくなるかもしれない、とも感じた。とにかく遺跡の現状把握を行うことができた良い経験であつた。こうした踏査は、なぜ先史時代の人びとがそのような場所で活動を行ったのかなどを考える際にとっても重要になる。報告書や論文、出土した遺物をいくら眺めても、こうした情報は手に入らないからである。

まだ発掘・報告されていない情報を得る必要があるときには、発掘調査をおこなって新たな資料を得る。東南アジアでは日本のように開発に伴う発掘件数は非常に少ない。したがって、まだまだ多くの遺跡が未発掘のまま地中に眠っている。研究者は自身の研究に最適な遺跡を踏査して探し、発掘を行う。例えば、ベトナム中部・ホアジエム遺跡（先史時代の甕棺墓遺跡）では、フィリピンやタイの土器と酷似する土器の出土が報告されており、その全容と詳細を把握するために発掘調査をおこなっ

た。何十基もの甕棺の出土、人骨の検出、鉄器や青銅器、漢代五銖銭の出土など、当遺跡の発掘を通して様々な経験をする事ができた。形質人類学者も加わった学際的な調査団での仕事で、人骨の知識の重要性を痛感したのもこの時である。

考古学とは、人間活動の中で生まれた様々な痕跡から、人類の文化を研究する学問である。だから、どんなに時間がなくても、環境がそれを許さなくても、「痕跡」を見逃さないように精一杯努力しなくてはならない。遺跡は通常、地下に埋まっているものなので、発掘によって顕わにされれば元の状態に戻すことはできない。土砂の堆積の状況などはその最たる例である。すなわち発掘は破壊と同義とされる。

こうして細心の注意を払って取得した遺構と遺物の情報は、整理作業を通して図面や表などとして情報化され、報告書が作成される。

全ての過程で、様々な「スキル」と「体力」と「気力」が必要であった。スキルを

例示すれば枚挙に遑がなく、他／多分野への興味と理解が時と場合に依じて必要である。

大学に入学し、考古学をすることを通して、私は常に様々な刺激を受け、探究心と実行力を培ってきたように思う。そして、自分の見聞きした実体験から物事を判断する思考が確実に身につけてきた。

自分が今何をしているのか、何をしたいのか、何ができるのか自認し、行動することが、答えの用意されていた高校生までの勉強とは異なる、大学入学以降、一生涯続く大人としての学びの姿勢のような気がしている。